

『ドン・セグンド・ソンブラ』と自然

高 見 英 一

ラテン・アメリカ文学は、今世紀になって、多くのすぐれた作品を生んでいる。

リカルド・グイラルデス Ricardo Güiraldes の『ドン・セグンド・ソンブラ』(Don Segundo Sombra) は、アルゼンチンの草原を旅する牛飼いの生活をテーマとする、いわゆる、 gaucho 小説の傑作である。そして、その高い芸術性によって、アルゼンチンの古典として、不動の位置をしめ、ラテン・アメリカの文学史上、忘れることの出来ない作品である。

◇ ◇ ◇
リカルド・グイラルデスは、一八八六年、ブエノス・アイレスで生まれた。一九一五年、処女詩集“El cencerro de cristal”を出版、最初、否定的な批評も多かったが、個性的な表現をもつ詩人として認められた。同年“Los Cuentos de muerte y de sangre”をも発表。一九一七年、自伝的小説“Rancho”一九二三年、“Xaimaca”を発表、一九二六年、彼の作家としての地位を不動のものとした“Don Segundo Sombra”を書き上げたが、翌一九二七年、パリで客死した。

◇ ◇ ◇

『ドン・セグンド・ソンブラ』は、全篇が一人の少年の思い出という形式で書かれているが、その梗概は次の通りで

ある。

「少年」は、アルゼンチンのある部落の叔母のもとに引きとられて暮らしているが、その家を牢獄のように感ずる。しかし、外では、鍛鬼大将となつて、腕白ぶりを発揮している。そのうちに、そんな生活にも嫌気がさす。折りにふれて思い出すのは、楽しく自由であつた幼年時代の農場での生活であつた。「少年」は十四歳になつていた。そんなある日、夕闇の中で、ふと、ガウチョ（牛飼い）のドン・セグンド・ソンプラの姿を見かけ、何とも云えない彼の魅力にひかれてしまう。遂に、牢獄のような叔母の家から逃げ出して、ドン・セグンド・ソンプラのあとを追ひ、彼とガウチョの生活を共にするようになる。

こうして、種々な事件が、「少年」の生活にもち上ってくる——アウローラとはかない恋、荒馬の調教、強行軍、水を求めて暴走する牛の群の追跡、傷ついた牛の屠殺、槌でなぐりつけるように降り注ぐ大雨、旅先の部落での賑やかな祭り、鬩鷄、競馬、野牛の襲撃、残忍な小がにの群棲する沼に踏み込んで愛馬を失う悲しみ、あるいはつまらぬ面子にこだわる男たちの懷慘な争い等々。

こうして、不慣れた草原の労働や、雨風にさいなまれながらも、少年は、ドン・セグンド・ソンプラの慈愛のこもつた指導の下に、牛を追ひ、若駒を仕立て、どんな運命にも屈しない立派なガウチョに成長する。そして、なおも、一カ所に定住することを好まない彼らは、牛の群を追つて旅を続ける。

「少年」が、叔母の家を逃げ出してから、早くも五年の年月が流れるが、ある日、一通の手紙を渡される。それは、思いがけなくも、それまで「少年」の一度も会つたことのない、しかも、その存在も知らなかった実の父親が死んで、その遺産の管理を少年にゆだねたことを知らせるものであつた。

「少年」の心は大いに動揺する。驚きと悲しみに、混乱し、目に映る草原も別のもののように感じられるのであつた。しかし、結局、「少年」は父親の残した農場に留ることになる。そして、ガウチョとして育つた少年は、数養のある

『ドン・セグンド・ソンプラ』と自然

若者を友達にもって、自分も書物に親しむようになり、次第に洗練されていく。

ドン・セグンド・ソンプラは自分が手塩にかけて育てた「少年」が、一人前の人間となり、落着いたのを見届けると、再び、草原の生活に帰るために、夕闇の中を、暮れ残る地平線の彼方へと、遠ざかって行き、やがて、姿を消してしまう。「少年」は、彼の姿を見送りながら、物思いにふける。

◇

◇

◇

この作品は、おびただしい数の挿話の連続から成っており、筋は、とりたてていうほどの面白さはないが、主人公のドン・セグンド・ソンプラの性格や、グイラルデスの鋭敏な感受性にとらえられた風物の巧みな描写、自然を媒介としての豊富で絵画的なイメージの展開に用いられた、他の追従を許さない個性的な表現法には、読者の多大な関心をひくものがある。

◇

◇

◇

『ドン・セグンド・ソンプラ』を一読して、まず感じられるのは比喩的表現のきわめて多いことである。グイラルデスは、この手法により、彼の経験の独自性と、表現との間の距離を最短なものにすることに成功している。

yo vi la hoja cortar la noche como un fogonazo. (わたくしは、刃が、閃光のように夜を切るのを見た——第二章)

las nubes del naciente, largas y finas como pétalos de mirasol (日まわりの花びらのように、細長くて薄い雲——第四章)

Aquellos sonidos se expandían en el sereno matinal, como ondas en la piel soñolienta del agua al golpe

del algún casote. (その響きは、眠たげな水の面に投げ込まれた石の波紋のように、朝の静けさの中に拡がっていった——第四章)

mi petizo escarceaba seguido como llamando a la madrugada. (わたくしの若駒は、暁を呼ぶかのように、何度も、べらべらと駈け回った——第六章)

Sentí que el corazón corcoviaba en el pecho como zorro entrampado. (彼は自分の心臓が、わなにかかった狐のようにとびはねているを感じた——第七章)

Las apuestas... caían con precipitación de gotera. (賭け金は、雨だれのように、しきりに落ちていた——第八章)

Las candillas temblaban como viejas. (油灯は老婆のようにふるえていた——第九章)

un hoyuelo como la risa en la mejilla tersa de un niño (幼児のくるくるしたほほにうかぶ笑うほのような渦——第十章)

La luna, ..., blanca como escarcha mañanera. (朝の霜のように白い月——第十五章)

El campenimiento,, desapareció en la noche y la pampa, disolviéndose en direcciones distintas como puñado de hornigas en el aire. (キャンペンは、夜と草原の中に消えていき、それは、空を飛ぶ、一つかみの羽蟻のように、四方に溶け込んでいった——第十五章)

以上の例においては、作者の感覚、とくに視覚的な浮き彫りが美しくあらわれている。直喩は、完全であるためには、対象を説明すると同時に、高めもせねばならないとされているが、グイラルデスのそれは、高い抒情性を帯びて、適確に対象を説明しているといえよう。

さらに、

Breves palabras caían como cenizas de pensamiento internos. (短かい言葉が胸の中の思いの骨灰のように、落ちた。——第十二章)

Sentí que la soledad me corría por el espinazo como un chorrito de agua. (ぢびしが、水滴のように、私の背筋を流れるのを感じた——第十五章)

などでは、イメージを急激に鮮明なものとして読者の心の深部に到達させ、それぞれの言葉が、互いに、密接に関連しあいながら、適確な表現を獲得している。

比喩的表現の全体を通じて、“como”（ように）によるものが非常に多いが、これは、この作品の文体における一つの特徴となっている。

また、馬や、パンパに存在する動植物が、比喩的説明に多く用いられているが、これは、地方色を読者に強く印象づけるのに効果的である。さらに、その若干の例をあげよう。

El sueño cayó sobre mí, como una parva sobre un chingoro. (アメリカ雀の頭の上に、たくさんの麦が落ちてくるように、睡気が私の上に落ちてきた——第三章)

... más bien viviría como puna, alzado en los pajales, que como cuzco de sala (……部屋に住む大ころの

ようにではなく、わたしは、むしろ、昂然として、叢にいる、ピューマのように生きたい——第五章)

Me senté como potro. (わたしは若駒のように坐った——第九章)

Nos acomodamos en el redondel, como un pato alrededor del bañadero. (池のまわりのあひるのように、われわれは、砂場を囲んで座をしめた——第十三章)

La galleta era como poste de quebracho y gritaba a lo chanco cuando le miramos el cuchillo. (パンはケブラーチョ「南米産の堅い木」の柱のようだった、そして、ナイフを突き刺すと豚のように、悲鳴をあげるのであった——第十五章)



次に、彼の表現法の特徴としてあげられるものは、擬人法である。『ドン・セグンド・ソンプラ』では、ほとんどのすべての無生物が人間と同様な性格を持ち、その上、人間のように心理的な反応を示し、行動を起す場合が多い。

El aliento de los campos dormidos. (眠っている草原の吐息——第四章)

La tierra se había puesto a despedir perfumes intensamente. El pasto y los cuadros esperaban con pasión segura. El campo entero escuchaba. (大地は強烈な香りを放つべく、身構えていた。牧草や竜舌らんは、心静かに、ひたすら「大雨の襲来を」待っていた。草原全体が耳をすませていた——第九章)

Los postes, los alambrados, los cuadros, lloraron de alegría. (標柱も、針金も、竜舌らんも、嬉しみのあまり、泣いていた——第九章)

El campo sudaba por dondequiera cuando salimos de mañana. (朝、われわれが出かける時、草原は、どこもかしこも、汗をかいていた——第十四章)

El suelo debía de sufrir como animal embichado. (その土地は、蛆虫にたかられた動物のように苦しんでいるにちがひなかった——第十五章)

El cielo tendió unas nubes sobre el horizonte como un paisano acomoda sus colchadas matras para dormir. (田舎の人が、ねようとして、色染めのふとんを敷くように、空は、地平線の上に、幾ひらかの雲を拡げた——第十五章)

その他にも、俄雨、太陽、光、朝、昼、夜、夕暮れなど、自然物や自然現象の多くが擬人化されている。そして、この表現法によって、自然について、新鮮なイメージを生み出しているばかりではなく、その時々における、喜悅、悲哀、恐怖、孤独などの感情を巧みに暗示している。

ことに、擬人化された、「夜」と「太陽」は積極的な意志と力とをもって人間に干渉してくるものとして描かれている。このことは、ガウチの生活に、それらが、重要な意味を持つものであることを示している。

... sintiendo en mis espaldas y hombros el apretón del sol como un consejo de perseverancia. (自分の肩や背中を、我慢しろとでも云うように、太陽が抑えつけるのを感じながら……——第八章)

La noche me apretaba las carnes. (夜は、わたくしの肉体をしめつけていた——第十九章)

こうした表現手法においては、人間と自然とが同じ比重をもって、時には、自然の方が大きな比重をもって、互いに

干渉し合っていることを強く意識させる。こんなところにも、グイラルデスの自然感を見ることが出来るだろう。

◇

◇

◇

次に、この作品の美しさは、追憶の美に依存するところが多いが、その表現法について考察して見よう。

冒頭、「少年」が、町はずれの、夕闇の迫る川のほとりで、幼年時代のなつかしい思い出を語るところがあり、その静かな筆の運びが物語りの序曲となっている。そして、この追憶が終ると、活気を帯び変化に富んだ現実の描写に移行している。

こうして、時折り、追憶の場面が出てくるのであるが、第十章では、浅瀬で馬に水を飲ませながら、第二十二章では、かつて、家出を決意した川辺の近くで、その香りをなつかしみながら、追憶が語られている。最後の章は、自分の所有となった沼のほとりで思い出にふける描写で始まり、中ほどで、追憶の追憶という形式で、今までの、水の景色のある追憶の場面が、またしても、あらわれてくる。

静かな追憶から活気のある現実へ、その現実から、再び追憶へという反復作用によって、ガウチニの実際の生活の厳しさ、人間どうしの煩わしい葛藤のもつ生々生々さを巧みに緩和して、作品全体に落ち着いた、詩的香気を与えている。

ここで、とくに、興味を唆るのは、こういった追憶が、常に、川とか沼とかの、水のほとりでなされていることである。

en mi vida el agua es como un espejo en que desfilan las imágenes del pasado. (わたくしの人生にあっては、水は、過去のイメージが、次から次へと、姿を映す鏡のようなものである——第二十七章)

これは、作中の「少年」の語る言葉であるが、作者は、水と追憶との間に、意識的に、密接な相関々係を結ばせてい

『ドン・セグンド・ソンプラ』と自然

る。フアン・コリヤンテス (Juan Collantes de Teran) は「リカルド・グイラルデスの小説」(Las novelas de Ricardo Güiraldes) の中で、「水のテーマは、この小説『ドン・セグンド・ソンプラ』の一つの象徴となつている。グイラルデスは、水をば時を表わす道具として用いていることに疑いはない。人生の不断の流れが、水の流れに象徴されているのである。」と指摘している。

こうして、作者は、水の流れによって、パンペの自然の美しさを抒情的に歌い上げると同時に過ぎ去って行く時を暗示しているのである。



En la pampa las impresiones son rápidas y espasmódicas, para luego borrarse en la amplitud del ambiente sin dejar huella. (パンペにおいては、印象は瞬間的であり、発作的である。そして、たちまちのうちに、宏大な周囲の中に消滅して、跡を残さない——第八章)

作品『ドン・セグンド・ソンプラ』のかなりの部分は自然の描写にあてられている。一般に、自然描写は、たび重なりと退屈を感じさせるものであるが、グイラルデスは、先に述べた、活潑に流動する自己の内部の世界の暗示の他に、静動、明暗などの急激な変化や、微妙な対照を描くことにより、あるいは、大地から天上、自分の周囲から、無限の地平線の彼方へというように、一瞬々々に方向を転じる作者の視線、あるいはまた、イメージの思いがけない変化を与えることにより、描写が単調なものに流れるのを回避している。

たとえば、沈鬱、静寂、孤独な闇の描写の後の、慈愛、幸福、活力を暗示する太陽の出現、残酷な闘争の後における、静かな冥想、といったような、明暗、静動の繰り返しにより、一種の律動感をかもし出している。大雨の襲来を予感して、じっと息を殺して待ち構えている草原の描写、小が、にの演ずる悪感を催すような、醜惡な争いの後での「太陽

は沈みかけていた。それぞれの穴からは、あの、いやらしいか、が一匹ずつ這い出して来た。……地面は、そいつらで蔽われていった。奴らは、仲間には目もくれずに、次第に姿を消していく火の玉に向って、ゆっくりと歩いて行った。それから、胸のあたりで、まるで血に染まったように赤い手を折り曲げて、じっと動かなくなった。……祈りを捧げていたのだろうか。」というような文章、さらには、野牛と少年との死闘の最後の「すっかり意識を失ってしまう前に、わたくし達は両方とも、草原と空との深い静寂の中に、動かなくなってしまうているのを感じた」、という描写、小が、の群に、悲惨にも肉を食いちぎられて白骨に化していく愛馬やそのか、の穴が無気味に点在する沼地の風景、「私は空を見上げた。もう一つの、か、の、いや、星の沼だ。その一つ一つの小さな穴のむこうには天使がいるにちがいない。おびたらしい星の数。その雄大なこと。パンパすら、ちっけなものに思えた。わたくしは笑いたくなった。」という文章、つまり、暗い沼地の上を低迷していた「少年」の憂鬱な視線が、突然、方向を変えて、雄大な星空に向けられ、無気味なかに、の穴だらけの沼に対して天使の住んでいる輝く星空が対置され。地上の出来事によってかもし出された、みじめな気持ちから、大草原のパンパさえも小さく見えてくるような爽快な気分への急転換があるといった、このような対照の妙は、読者に、新鮮な印象を刻みつけたいではない。同時に、これらの描写は絵画的な構成を感じさせ、グイラルデスの感覚、とくに視覚の鋭さを思わせる。

◆ ◆ ◆
自然とからみ合わせながら今まで、表現法の特徴的なものを述べてきたのであるが、さて、この作品におけるグイラルデスの意図は何であろうか。

それは、自然を媒介として、自己の内部に秘められた精神世界の展開ではなからうか。
作者は、後に述べる諸事情から、作品中の少年「わたくし」の口を通じて、自己の思いを語っているものと考えることが出来る。すなわち、この作品は、過去を懐かしみ、追憶の美を享受するグイラルデスの心の自伝ともみなされよ

う。

というのは、彼に描かれた、自然も登場人物も、現実在るものではなく、すでに題名の示しているように、ソンプラ、すなわち、影なのである。

Las aguas del río hicieron a mis ojos y los reflejos de las cosas en la superficie serenada, tenían más color que las cosas mismas. (川の水はわたくしの目に冷たく映ったが、静かな水の面に映ずる物の影の色彩は、その物自体の色彩よりも、一層、あざやかであった——第一章)

時は無情に流れ去る。しかし、それだけに、そこにとらえられたさまざまな事物が、一段と鮮明な輪郭と本質をあらわにして、グイラルデスの心に映るのである。

自然を前にした「少年」に、「わたくし」は思い出にふけているのか、それとも、目で見ているのか、わからなかった」と作者は語らせているが、これも、彼の描いているものが、現実ではないことを暗示するものとみなされよう。

主人公ドン・セグンド・ソンブラにしても、血肉をそなえた人間というよりも、抽象化され、何かの暗示、大草原の象徴を感じさせる。このことについては、作者自身、作品の中で述べている。「わたくしは、じっと動かないで、馬と騎手のシルエットが、輝く地平線を背景にして、不思議と大きくなって遠ざかって行くのを眺めた。わたくしは、幻を、一つの影を、過ぎ去って行く、実際に生きているものというよりは、むしろ、一つの観念である何かを見たような気がした。それは、川の流れを深みに呑みこむ淀のような力で、私を引きつける何ものかであった。」これは、少年が初めてガウチョのドン・セグンド・ソンブラを見た時の印象である。また、最後の章で、「土の流れのように見える道を通して、馬と騎手は、あざみの草の中に、大きくなって、丘を登って行った。その二つのシルエットは、一瞬、夕暮れの、緑色を帯びた光を斜めに浴び、空に鮮かな輪郭を描いた。遠ざかって行くそれは、人間というよりは、むしろ一

つの観念であった」と再び繰り返している。ドン・セグンドも、彼のパンパも、土の流れのように見える道、すなわち、「時」に流されて、去って行ってしまうのである。

大草原パンパを暗示する観念的なガウチョのこの物語りの基調は、郷愁であり、さらには、大自然の前におかれた人間の卑少、宿命観といったものであろう。これらは、また、彼の他の作品の基調ともなっている。



この作品の理解を深めるために、彼の作風ならびに精神に影響を与えていると考えられる諸事実を目を転じよう。

まず、重要なことは、グイラルデス自身、アルゼンチンの農場主の息子として生まれ、『ドン・セグンド・ソンプラ』に登場する「少年」と同様、幼年時代は両親と共に、農場の生活を実際に経験しているという事実である。大地との、この直接的な接触の経験は、後になってのブエノス・アイレスやパリにおける都会生活とともに、常に草原の旅を続けるこのガウチョの物語りに決定的な影響を与えている。

騒々しい都会生活に対して、グイラルデスの感じた嫌悪の情、疲れた神経を慰めてくれる自然への愛、恋の冒険の煩わしさ、旅への憧れ、ジャマイカ、カリブ海方面への旅行。こうしたことは、彼の心情を説明している。実生活においても、郷愁と旅への憧憬を、彼は常に感じていたのである。作中の「彼、ドン・セグンド・ソンプラは自由を愛した。虚無的で孤独な心の持主で、人との付き合いが続くと決って疲労を感じるのであった。行動に関しては、歩くこと、永遠に歩き続けることを願ひ、話は独言を好んだ。」「人気は彼のためになるどころか、彼を疲らせた。」というドン・セグンド・ソンプラの性格は、そのまま、グイラルデス自身に当てはまるだろう。

さて、グイラルデスの活躍した時期は「近代派」から、ボルヘス(Jorge Luis Borges)を中心とする「前衛派」(Vanguardia)の時代への過渡期であった。

ボルヘスは、ヨーロッパでの長い滞在の後、一九二一年にブエノス・アイレスに帰って来るが、彼の帰国と共に、『ドン・セグンド・ソンプラ』と自然

「前衛派」が優勢となる。そして、アルゼンチン文学の新潮流を告げる、機関誌“Prisma”が発刊され、後、同じ系統の機関誌“Proa”の刊行を見る。この“Proa”の編集において、一九二二年には、グイラルデスは重要な地位をしめている。『ドン・セグンド・ソンブラ』は、この「前衛派」の人々の後援を得て、発行されているが、書かれたのは、パリにおいてである。

グイラルデスはフランス文学についても、該博な知識を持ち、とくに、ボードレール、フロベール、ラフォルグ、マラルメを好んだ。彼のメランコリックで暗示的な表現はマラルメに負うところが多いとも考えられる。

一方、いうまでもないことであるが、自然がグイラルデスの精神に与えた影響は多大である。このようなことは、ラテン・アメリカの他の多くの作家にも当てはまるもので、ラテン・アメリカ文学の誕生以来、伝統的なものである。これは、新世界への移住者達が、常に、自然を敵として、あるいは友として、生活の基盤を築いていったという事実を考えると、容易に理解出来る。

ファン・ピント (Juan Pinto) は、「現代アルゼンチン文学概説」(Breviario de Literatura Argentina Contemporánea)の中で、「アルゼンチンの風景は、わが国の作家によって発見され、文学的資産となった。わが国の文学を最もよく特徴づけているものの一つは、風景である。」と述べているが、グイラルデスは、この資産を存分に活用したものと云えよう。

しかし、グイラルデスの描いた風景には、先にも述べたように、実在するものと云うより、むしろ彼の幼年時代の記憶に残っている、あるいは郷愁に彩られた自然、すなわちパンパの風景である。

現実のパンパは、きわめて速度の早い経済的發展によって、急激な変貌をとげた。すなわち、鉄道の発達、草原の趣きを変え、有刺鉄線の利用により、野原は囲まれて、家畜群は少なからず自由を奪われ、ガウチも髭を剃り落して、殆ど姿を消し、農園で日雇い仕事にたずさわっている。

グイラルデスの憧憬してやまない偉大なパンパは、文明の侵蝕により、傷だらけとなり、草原の英雄ガウチョも、その地位を追われて行くのである。

こうした点から見ても、『ドン・セグンド・ソンプラ』は、時とともに失われて行く、パンパの自然や、その中で生活にたいする挽歌であり、また、自然に投影する、彼の郷愁に溢れた心の影（ソンプラ）とも云えよう。了

主な参考文献

- Ricardo Güiraldes : Don Segundo Sombra (Editorial, Losada Buenos, Aires 1957)
Juan Collantes de Teran : Las novelas de Ricardo Güiraldes Escuela de Estudios Hispano-Americanos de Sevilla, 1959)
Juan Pinto : Breviario de Literatura Argentina Contemporánea (Editorial La Mandrágora, Buenos Aires, 1958)
Pedro Henriquez Ureña : Las Corrientes Literarias en la América Hispánica (Fondo de Cultura Económica, Buenos Aires, 1954)
J. Beau-Garniel : L'Economie de L'Amérique Latine. (Collection Que Sais-Je ? N° 357)